

続・ 珈琲の思い出 36

鈴木優子

早く会いたい、とはやる気持ちを抑えて、二人はS町の裏のカフェに待ち合わせて行った。このカフェは優子のお気に入りの場所で、だから優子はお気に入りの人しか連れていきたくなかった。

昨晚会ったばかりだというのに、もう、二人はもう会いたくて会いたくてたまらなかった。昼間の明るいうちに、こうしてプライベートに会える、という喜びでいっぱいだった。

和樹ほど、うまそうにコーヒーを飲む人を優子は見たことがなかった。

運ばれてきたコーヒーをひと口啜ると、和樹はほんの一瞬息を止めた後、「ああ、いいね」と吐息まじりにつぶやいた。他愛もない、けれど楽しいおしゃべりをしながら、時折、カップに口をつける。そのたびに和樹は「ああ、いいね」を繰り返す。おしゃべり、ベラベラ、「ああ、いいね」。ベラベラ、ベラベラ、ベラベラ、「ああ、いいね」。それがあまりにおかしいので、思わず優子は言った。

「そんなにこのコーヒーが気に入った？」

「うん、うちは妻がコーヒーが嫌いで、吹き出物ができるとかなんとかで、家では紅茶ばかりなんだ。」

「和樹さん、自分で淹れたらいいじゃないの？」

「何だか手間がかかりそうで、だからいつもインスタントだった。でも、こうして本当においしいコーヒーを飲むと、やっぱり、いいね、って思うね。」

そう言うと、和樹はまたコーヒーをひと口含み、「ああ、いいね」と呟いた。(続く)